木の葉をみるこ一しよに木の幹に注意する。外からみた所が櫻、椿、松等各々ちがふこと、どんな風にちがふかを注意し、外皮のすぐ下が生きてゐて養分や水が通る事を、生けた花の枝などの實物で綠色の部分をみせて話す。この樣な材料はいかにも理科的であるから敎へすぎない樣に、唯物をぼんやりみない習慣をつけるこいふ樣にしなければならない。子どもの驚異にみちた心の芽を正しく伸してやる爲に大人がまめに心とからだを働かさなければならない。

梅の花

花の少い此頃に咲く强い花であることを話し乍らその香をかゞせる。そしてみんなの知つてゐる花で何の花によく似てゐるかをきいてみる。

第九週

手　技

自由畫　二回

菜の花

東京邊では土にぢかに咲く菜の花はまだない。けれど桃の花にそへて雜段を飾り度い花であるから桃の花と一しよに觀察させよう。これは草の花である事など注意してどこがちがふか比較させ乍ら。

第十週

芝の芽

芝のやゝ綠にならうとする氣配に近よつてよくみると、もう下に立派に芽が出てゐる。芝の芽だけでなしに一つ一つ木や草の芽に注意してみさせ度いこのごろ、子ども達も、春の近づいて來てゐることをそれとなき喜びに感ずるのではないだらうか。

第五週

自由に二回かゝせる

自由畫　二回

ぬりゑ　一回

おもちやがあればトラのおもちやをみてぬらせるのがよいが、そうでなければ適當に保姆がお手本をぬつて見せてぬらせる。

製作　三回

スキー人形

畫用紙にスキーにのつてゐる樣な形の人をかゝせて、これにスキーを作つてその上にのせる。一人の幼兒に數個のスキー人形をつくらせる。スチックスはヒゴでつくり、丸いところは畫用紙でつくらせる。

スキー小屋

スキー小屋はボールの空箱を利用してつくる。その屋根の上に綿なごかぶせて雪の積つた樣子をあらはす。

第六週

自由畫　二回

電車

乘物の繪本の觀察、幼稚園の近くに電車が見られる便のあるのはよくそれを見せる。

製作　三回

旗

ヒゴを旗さをにして模造紙でつくり、飾り旗は絲にいくつもつゞけて吊して、スキー場を飾る。

汽車

この汽車は保育室の一隅を客車内に仕上て、バックの黑板なごに車窓をあらはしてその感をあらはす位で大して製作こいふほごの事もしないのである。

第七週

自由畫　一回

粘土　一回

汽車

汽車は細長き形に粘土を作つて篦で窓をあけ、車をほるやうにする。箱庭の汽車の樣な形のものが粘土がこわれなくてよい。

ぬりゑ　一回

オヒナサマ

お手本ぬりを見せてぬる。

製作　三回

おひな様　ふくらみ雛

これはかつて幼兒の教育に手技の材料として掲載した事もあつて御承知のものであるかとも思はれますが

畫用紙に直徑一五センチの外輪と、直徑四センチの內輪の二重の圓を畫き內輪だけは切りおとしてしまふ。外輪の兩端に二センチに四センチの耳をつくる。

顏は直徑四センチの圓形につくる。

臺は高さ三センチ半、横二五センチ半、縱七センチの箱を畫用紙或はボール紙にてつくり、臺の側面を赤、綠、黃で彩色する。臺の適當の所に切りこみを入れて、おひな様の外圓の耳を臺にさし込む様にする。

屏風

畫用紙の八ッ切に、桃の花、その他適當の模様を畫かせたり、或は切り紙で模様をはらせたりしてつくる。

第八週

自由畫　二回

製作　四回

おひな様つゞき

一組一齊に出來ないから、ある一グループはおひな様製作に、ある一グループは自由畫、その他の作業にといふ様にして、先週にひきつゞきおひな様製作をする。

內裏雛が出來上れば、櫻橘、くす玉、諸道具などと畫用紙或はボール紙にて簡單につくる。

年少組は保育室に一組內裏雛、諸道具、その他のものをつくり、幼兒には各自に內裏雛だけ一つづゝつくる事にする。

第九週

自由畫　一回

雛の節句で家庭で、幼稚園でいろ〳〵とおひな様についての觀察もよく出來てゐる時であるから、雛といふ題を特に指してかゝせて見る。

鋏仕事　一回

桃の花の切り紙

保育室に桃の花を插しておき、これを見て切らせる、枝は茶色或はみどりのクレヨンでかゝせる。

粘土　一回

自在につくらせる。

ぬりゑ　一回

ラッパスヰセン

ラッパスヰセンが用意出來ればお部屋に插しておく、ない時はお手本を見てぬらせる。

第十週

自由畫　二回

粘土　一回

動物の繪本或は寫眞などをよく見せて動物をつくる材料を與へておく。

手足を胴によくつけるやうに、心にヒゴをさしその上を粘土を二重につける事、一度に出來ない時には濡雜巾をかぶせて次の時につゞけてつくる事など注意する。

年長組、第三保育期

生活訓練

第六週

幼兒にとつて幼稚園生活の終りが近づいて來た。と同時に、小學校入學といふ樂しいことが近づいて來た。その練も少しは心がけてやらなければなるまい。